



Title	和歌六首
Author(s)	仲田, 應弘
Citation	懷徳. 1940, 18, p. 55-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89054
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

庭前種竹一句過。早已亭亭雅趣多。夏雨送涼風掃拂。紗窗招月影婆娑。

契沖が住みたりし和泉なる伏屋氏舊邸を訪ねて

音代節雄

水清く陽の暖き和泉なるこの里にして君は學びし

秋の日のしみらにぬくし柿の實のたわゝにみゆる伏屋の屋敷

庵のあと示すと主柿の實の下照る小徑藪かげに行く

池田川淙々として切崖の裾廻をめぐり秋の日ぬくし

切崖の藪下とよみ行く水を君聞きたりし庵の址かな

母

昭和十五年六月十八日發病

仲田應弘

食後の藥服まして横になる今の暑さは母にこたへむ

蒲團より伸して足よ冷たくてさすりくれよと云はぬ母かも

同じ月二十八日午後五時二十分逝く

リウマチの腫れも引きたる母の手を組まして従弟は有難がるも

添ひ輿の人ら勞りくれつつも輿は窪みをゆきて重たし
竹の竿長長しくて母の骨を拾はむとして音立ちにけり
母のものを整理してゐる押入に皺を伸したる紙袋あり

爽 天 抄

大陸の爽天をおもふけさの秋
夕影や露滴相識る涼しさに
露のうち桔梗實とはなりにけり
桔梗のふたゝひ咲きし且かな
稻妻や須叟の雲間に妙音天
盆の月櫻の宮の燈ろかな
秋の蚊となりつゝ草の茂りかな
霧にうく星やは海の果てしらす
霧の夜のしづかなるより秋の海

入 江 來 布